

2004 年度 第二回 LIPER 国際研究会

アジア地域 4 カ国から講師をお招きして、各国の図書館情報学教育の現状についてご講演いただく全二回の LIPER 国際研究会の第二回記録。

日時：12 月 18 日（土） 13:00-16:30

場所：慶應義塾大学（三田） 東館 5F プロジェクト室

講師： Dr. Pimrumpai Premsmit（タイ）

Department of Library Science Faculty of Arts, Chulalongkorn University

講師： 李常慶（中華人民共和国）

北京大学信息管理学部専任助教授

司会 竹内比呂也（千葉大学文学部）

記録 宮原志津子（東京大学大学院教育学研究科）

以下のテーマについて各講師によるそれぞれ 1 時間程度の講義と質疑応答の後、1 時間程度のディスカッションを行った。

1. 自国における図書館情報学教育の沿革
2. 自国における図書館員（司書職）の認定制度と認定母体
3. 自国における最近の図書館情報学教育カリキュラムの動向と内容の変化
4. 自国における図書館員（司書職）の就職機会の動向
5. 自国内および近隣諸国との間の図書館員（司書職）教育機関間の単位互換制度が存在するのであれば、その仕組みについて

【開会挨拶】 根本彰

LIPER は 3 年計画で図書館情報学会会員を中心に、情報専門職の制度化への提言のために始まった。国際的な視点からの見直しを図り先進国の動向に目を向けるために、昨年はアメリカのミシガン大学から Durrance 教授をお招きして講演を聴いた。また、韓国の図書館教育事情に関する権恩璟氏の講演を拝聴し、専門学科レベルの教育をベースにしているという話がきっかけになって、アジア各国での情報専門職教育の実情を踏まえた上で日本の情報専門職教育を考える必要があると認識するに至った。今年度は、アジア各国から 4 名の講師をお招きする。第 1 回はシンガポールと台湾の動向について話を聞き、大学院レベルではかなり高度な専門職教育が行われていることがわかった。本日の講演テーマであるタイ、中国ではどのような状況なのか興味深い。今後 2 月 12 日にはイギリスの事情につ

いて筑波大学のサンドラ・パーカー氏と青山大学の小田氏による報告をあわせた研究会がある。これらの講演から明らかになるアメリカ、イギリス、アジアの現状を踏まえて日本の状況を考えていきたい。

【参加者自己紹介】（全 16 名）

逸村裕（名古屋大学）、上田修一（慶應義塾大学）、栗山正光（常盤大学）、汐崎順子（慶應大学）、柴田正美（同志社大学）、嶋袋ワカ子（日本図書館協会）、鈴木正紀（文教大学）、高橋昇（九州女子大学）、竹内比呂也（千葉大学）、根本彰（東京大学）、廣田慈子（山形県立米沢短大）、三浦逸雄（東京大学）、宮原志津子（東京大学）、宮部頼子（立教大学）、三輪眞木子（メディア教育開発センター）、渡辺信一（同志社大学）
（五十音順）

第 一 部

【講師の紹介】 竹内比呂也

Dr. Pimrumpai Premsmit(タイ) Department of Library Science, Faculty of Arts, Chulalongkorn University

チュラロンコン大学文学部より優等学士を取得。その後奨学金を得て米国に留学し、マサチューセッツ州ボストン市のシモンズカレッジより、図書館情報学分野の科学修士および文学博士を取得。現在は、チュラロンコン大学図書館情報学科の学科長である。研究業績には、情報管理、情報システム、図書館情報学教育、学術図書館の戦略計画、および電子図書館に関する幾つかの論文がある。現在の研究関心は、大学図書館におけるリーダーシップおよびケーススタディである。

【プレゼンテーション：タイの事例】 Pimrumpai Premsmit 博士

プレゼンテーションのアウトライン

- ・ タイにおける図書館教育の歴史的経緯
- ・ 学部での図書館学教育課程の内容
- ・ 大学院での図書館学教育課程の内容
- ・ ジョブ・マーケットにおける状況
- ・ 専門家のための継続教育

【質疑応答】

Q:根本氏 タイの学術図書館と公共図書館の数と図書館員の数を知りたい。

A:Premsmit 博士 学術図書館は大学図書館だけで約 50 館あり、短大や研究機関の図書館はおそらく 16 館ある。公共図書館は大変多いが、公共図書館システムは整備されていない。首都バンコクの公共図書館はバンコク・メトロポリタン・アドミニストレーションが統括

している。教育省が統括する県立図書館は76館あり、一方ディストリクト図書館のうち王女を記念したプリンセス図書館と呼ばれる特別な図書館が40館ある。このように数は多いが、図書館システムが確立しておらず、アメリカのニューヨークやサンフランシスコとは比べものにならない。しかし県レベルでは地元の人に貢献していると思われる。

Q:宮部氏 なぜ博士課程をあなたのところで開設しなかったのか。またコーンケーン大学は新しい大学なのか。

A:Premsmit 博士 実際は開設を計画しており、今学期頃にはぜひ開講したい。現在学部の教員は3人だが、博士課程を開講するにはもう一人教員が必要である。コーンケーン大学は北東にある大学だが、そんなに新しい大学ではない。

Q:三輪氏 60%以上の卒業生が学術図書館に就職しており、一方で公共図書館システムが強固でないということだが、公共図書館では高度な教育を受けた職員は求められないのか。

A:Premsmit 博士 政府機関の図書館では高度なレベルの職員が求められるが、公共図書館のレベルは低い。公共図書館は給与が低いいため、高いキャリアを持つ人は関心を向けない。

Q:三輪氏 チュラロンコーンでは卒業生は公共図書館に就職しないというが、他の学校ではどうか。

A:Premsmit 博士 そんなに多くはないと思う。チュラロンコーン大学ではプログラムの名称を「図書館学」から「情報学」に変えたところ、多くの学生が来た。図書館で働くにはやはり限界があるので、より広い就職機会を与えることができると考えている。一方で修士課程では働きながら高度な学位を求める人が常に入学しており、入学者の80%が現場の図書館員や教員である。

Q:逸村氏 タイ図書館協会と図書館学校との関係はどのようなものか

A:Premsmit 博士 実際のところ、図書館学教員の大半は協会の会員である。協会では分科会や学術図書館グループ、公共図書館グループ、教育者グループなどのグループに分かれて活動しており、それぞれ緊密な関係を有している。

Q:竹内氏 チュラロンコーン大学では一年で何人の学生を受け入れているのか。

A:Premsmit 博士 学部と大学院では異なる。学生は全国規模での国立大学の入学試験を受けて入学後に教養学部在籍し、2年目に専門科目を選ぶ。学生の大半は図書館情報学より外国語に興味があり、「情報学」を専攻するのは約20人である。70人以上が英語、40人が中国語、30人が日本語などの人気のある科目を専攻する。修士課程は年間15人の定員だが、通常は20~25人程度を受け入れている。かつては全国で2校しか修士課程を開設

していなかったが、30人程度を受け入れていたこともあった。入学には英語能力が要求される。

Q:三浦氏 学術図書館のジョブ・マーケットについて聞きたい。学術図書館には工学やコンピュータ・サイエンスなど他学部を卒業した学生が就職することもあるのか。

A:Premsmit 博士 コンピュータ・サイエンスの卒業者は少ない。情報技術を学んだ学生が図書館に関心を寄せることは少なく、コンピュータや情報科学の学位を得た者にとっては、図書館は魅力のある職場ではないようだ。

Q:宮部氏 図書館職員には女性が多いのか？

A:Premsmit 博士 タイでは女性職員が圧倒的に多く80%以上を占める。大学教員も学部では12名のうち、男性は1人のみ。

(余談として、講師が今回の会場に男性が多いことに驚いていたとの三輪氏からの指摘や、タイの公立図書館長のうち男性には一度も会ったことがないとの竹内氏からのコメントがあった。)

Q:根本氏 新設されたコーンケーン大学の博士課程の教員はどこで学位を取得しているのか。

A:Premsmit 博士 教員は情報通信技術分野の学位取得者や、電子通信業界などのビジネス領域から招いている。私の大学にもコンピュータ・サイエンスの学位をオーストラリアで取得した教員がいる。

Q:三輪氏 教員は図書館情報学の学位はどこで取得しているのか。

A:Premsmit 博士 コーンケーン大学の教員は80%がチュラロンコーン大学で修士号を取得し、博士号は海外で取得している。かつてはアメリカやイギリスが多かったが、最近ではオーストラリアへの留学が多くなってきた。特にキャンベラ大学とはビジティング・プログラムなどもあることから、コネクションがあって行きやすいことも関係している。

第 二 部

【李先生の紹介】 竹内比呂也

李常慶(中華人民共和国) 北京大学信息管理学部専任助教授

四川大学を卒業の後日本に留学し、図書館情報大学の修士課程、東京大学の博士課程で学ぶ。現在は北京大学信息管理学部の専任助教授として、図書館情報学、出版産業論を研究している。日本に知己が多いことでも知られる。

【プレゼンテーション：中国の事例】 李常慶先生

プレゼンテーションのアウトライン

- ・ 図書館情報学教育の歴史的流れ
- ・ 広範囲で行われている図書館情報学の主要な教育形態
- ・ 図書館情報学教育の改革と現状
- ・ 1990年代初め～1990半ばの図書館情報学機関の名称変更と改革
- ・ 近年における図書館情報学教育の動向
- ・ 図書館情報学の課題と問題、その将来

【質疑応答】

Q:渡辺氏 日本では情報専門職という意識を取り立てて強調しなければいけないという段階にきているが、「スペシャリスト」が市民権を持たない風土がある。中国ではかつて文化大革命において専門職を否定していたが、今日では、図書館における専門職という認識は確立されているのか。さらにそれは今後発展していくのか？

A:李常慶先生 資格制度導入の議論と関連があると思われるが、専門職制度が導入・確立されているのは間違いない。今日では職業資格認定制度が導入されたとき、現在の専門職制度をそのまま残すのか、分割して導入するかなど、どのように変えていくかが議論的となっている。例えば 専門職の級（初級・中級・上級）を決め試験を受けてもらう、専門職制度とは図書館員になったあと学歴や業績にあわせて図書館独自に決めるべき、などを議論している段階である。どちらにしても、中国の図書館員の専門職制度が崩壊することは考えられない。

Q:渡辺氏 それでは「文化大革命」のようなものが起こらない限り大丈夫なのか？

A:李常慶先生 「革命」はひとつの経験と考えている。今日の中国では1930年から40年代、50年代など、革命前の制度に歴史が戻ろうとしている。

Q:根本氏 図書館職員の採用について教えてほしい。

A:李常慶先生 中国の図書館の採用は図書館によって違うが、大学や市立・州立などの大規模図書館では大卒でなければならない。北京大学図書館の場合は学部卒業では無理で、大学院卒が求められる。小規模な図書館や図書室では大卒、極端な場合は高卒でも可能なこともある。学生の専攻は歴史学や中国語など多元化している。最も多く採用されるのは、コンピュータや歴史学である。採用に当たっては、認定試験とは無関係な図書館独自の試験があり、図書館ごとに募集を行う。

Q:根本氏 図書館員は公務員試験を受験するのではなく、図書館の個別の試験で入るのか？また図書館情報学の修了者などの資格は関係ないのか？

A:李常慶先生 個別の図書館の試験で入る。専攻などの資格は関係ない。むしろ学部レベルだと図書館情報学を学んだ者のほうが不利で、コンピュータ専攻の方が有利である。

Q:渡辺氏 10月に上海図書館に行った時、職員の応募資格には国籍は関係ないと聞いたが、本当か。

A:李常慶先生 国籍を記入するということはどの図書館でもないと思う。

Q:逸村氏 医学系の図書館員の認定や専用資格はあるのか。また医学図書館の団体はあるのか。

A:李常慶先生 ない。例えば医科大学、農業大学の図書館に就職するには、医学や農業を専攻した学生を優先するかもしれないが、全国的には資格や認定制度はない。医学図書館の団体はある。

Q:三浦氏 北京大学の図書館情報学教育を中心に紹介されたが、北京大学のように伝統があり図書館学を残す大学と、その対極にある上海の華東師範大学のように、図書館学をなくしてそれぞれの大学の特色にあわせてビジネススクールなどに吸収される大学があるのか、中国全体ではどちらの大学のモデルが有力か？

A:李常慶先生 私の意見では華東師範大学のやり方は極端であり、学長の個人的な思い込みがあると考えている。華東師範大学は中国の図書館界の中で孤立して相手にされなくなっている。北京大学や武漢大学のほうが主流である。図書館情報業界がなくなる限り、図書館情報学部はなくなることはないと考えている。

Q:三浦氏 北京大学の卒業生は図書館に就職している人が少なくなっているが？

A:李常慶先生 だから「信息管理」という名称に変えたのだ。必ずしも学生が図書館に就職することを前提としていない。武漢大学では学部レベルで「信息資源管理専攻」という新しい学部ができたが、北京大学でも大学院レベルで申請しようと考えている。しかし面白いことに、この専攻と情報学専攻と他の専攻がどう違うかを誰も説明できないことが問題である。

Q:逸村氏 資料の附表2を見ると、公文書学が増えている一方で北京大学にはないが、その立場からすると、「信息資源管理」とはどういう立場を示しているのか。中に入るのか。

A:李常慶先生 「信息資源管理」には情報学専攻、図書館学専攻、出版監修専攻、公文書学を全部中に入れるように考えている。ある意味でより広い意味での名前として考えている。北京大学では来年あたり、修士課程に導入されることが考えられている。さらに今後の中国の情報学部の名称は信息資源管理になることも考えられる。

Q:逸村氏 日本では新しい学部や研究科の新設は文部科学省の承認を得ないとできないが、中国では日本と違って、国家教育部とは無関係に学内で勝手に学部をつくることはできるのか？

A:李常慶先生 北京大学は特殊な大学なので、北京大学の裁量権がかなり与えられている。大学の内部で審査を経るが、国家教育部の許可がなくとも学部を新設できることもある。

Q:宮部氏 「一等級学科」と「二等級学科」の違いは？

A:李常慶先生 学科のレベル、分類の大きさを指す。ただし一等級学科がないと専攻を設置することが難しい。

Q:根本氏 全国的な信息管理系の規模や卒業生の数について教えてほしい。

A:李常慶先生 全国的な資料が見つからない。北京大学の専任教員は25から26名。武漢大学は80名くらい。他の大学は10人から30人前後。1人2人という場合は学部として成り立たないため存在しない。南京大学も北京大学より多い。北京大学は学部生45名募集しており、4年全部で200名弱。同時に1700名の通信制をもっており、大学院生は毎年50数名ほど集めているので、160から180名くらい。武漢大学の規模が一番大きい。他の大学は大学によって違うが、少なくとも20から30名以上の学部学生がいるはず。華北大学も北京大学よりは大きい。毎年全土で千人以上が卒業していることは間違いない。

Q:根本氏 千人以上の卒業生という数はマーケットとして小さいのか？

A:李常慶先生 小さい。さらに全員が図書館で働きたいわけでもない。

Q:宮部氏 給料はどのくらいか？

A:李常慶先生 国家図書館などは給与がよく、学生は入りたくても入れないほどである。県立や市立図書館などは他の図書館に比べて待遇が悪く、他の職業に比べると優遇されていないが暇である。

ディスカッション・セッション

[労働市場における図書館情報学卒業生の競争力について]

Q:竹内氏 2人の講師の話題にはかなりの違う面があり、特に北京大学の話はショックな内容だったと思う。いくつか共通の話題としては、卒業生のジョブ・マーケットの話がある。中国の場合、学部レベルの卒業生は図書館への就職は難しく、修士なら可能性もあるようだが、むしろ図書館以外に大きなマーケットがあるとのことだった。それに対しチュラロンコーン大学の卒業生に関しては、学部では企業に就職する学生が多いが、大学院では多くの卒業生が図書館での就職を希望し、他の学部から図書館に就職することもないこ

とから、実際に多くが図書館で働いている。そこで情報学部など他分野学生との就職をめぐる競争において、今後図書館情報学の学生が競争に打ち勝つために、例えばカリキュラム上の工夫など、どのようなことが考えられるかについて議論したい。

A:Pimrumpai 博士 ジョブ・マーケットに参入する学生のための準備としては、学生が公共や民間セクターに就職できる資質を備えられるよう、プログラムの目的を明確にすることが重要である。例えばカリキュラムの設計だが、学生がどのようなスキルや能力を身につけることを必要としているかという点から着手する。例えば図書館や他の情報機関では仕事をこなすためにはコンピュータ能力が必要であり、チュラロンコーン大学ではコースの統合を行ってコンピュータ能力の育成を図っている。特に図書館学科は教養学部の中でも哲学や歴史、外国語学科と比べてハイテクを扱う学科なので、学生の声に応じて新生のための基礎コンピュータ講座や、プログラムの構築、電子図書館、データベースなどを教えている。このように情報専門家にはコンピュータ能力が必要なのは言うまでもないが、もう一つ英語などの言語能力を同様に身につける必要がある。チュラロンコーン大学の教養学部の学生は外国語学科が基盤となっていることから、あまり大きな問題にはなっていないが、他の大学の図書館学部では問題になっているようだ。先日、アジア図書館情報学の国際会議がバンコクで開かれたが、アメリカ出身でオーストラリアの出版業界で働いている人から、学生の会話や文章力などの英語能力が十分でないことを指摘された。大学ではかつて単独で図書館情報学のための英語の授業を実施していたが、図書館情報学の技術やコンテンツを学ぶ単位を増やすためにこれをなくしたことも要因かもしれない。

A:李常慶先生 北京大学の場合、哲学や歴史学部などと比べ、図書館情報学部の卒業生は今まで就職はそんなに悪くなかった。その理由としては、経済の発展に伴って図書館が増えているので就職先がある程度確保されていたことと、図書館に就職するという認識が薄れ、企業や政府機関などの情報を扱う機関に学生を送るという意識が学部にあるためである。このような現状に基づくと、授業は電子関係やコンピュータに基づいたカリキュラム構成になる。その意味では、図書館情報学は本来の意味では情報資源管理ということになり、プログラム構成や就職先にしてもこの方向になるだろう。さらに就職できない学生を生む学部は廃止せよとの意見もあり、就職を見据えてカリキュラムを編成する必要がある。北京大学ではコンピュータ学部と図書館情報学部との境がなくなっているが、コンピュータの教員にはかなわない。そのために、情報のコンテンツを理解する上での「情報資源管理」の目標を立てなければいけない。学生にどのような知識を提供すべきか教員も悩んでいる。図書館情報学部の固有のシステムや教員自身が変化を妨げていないだろうか。北京大学では学生による教員評価システムが始まったが、教えている科が必要なのか、教えている内容に意義があるのかという点でいかに学生に認められるかが重要となる。

Q:竹内氏 北京大学には学内的にも競争相手がいるということだが、チュラロンコーン大学の場合は明確な競争相手はいるのか？

A:Pimrumpai 博士 学科の名前が図書館学から図書館情報学へ変わった時にカリキュラムも変わった。コミュニケーション学部の人には図書館情報学と内容が重複すると思っていたようだが、我々としては MIS や情報マネジメント、情報システムなどと内容が重ならないように気をつけている。ジョブ・マーケットの点では特に問題はないと思っている。図書館情報学や MIS、情報マネジメントの卒業生はジョブ・マーケットにおいて未だにニーズが高い。さらに情報学の学位を与えているので、情報企業においてでさえジョブ・マーケットでは有利に立っていると言える。

Q:三輪氏 図書館情報学と情報学を専攻した MIS の卒業生とはどう違うのか。

A:Pimrumpai 博士 MIS ではコンピュータそのものやシステムを扱っているが、図書館情報学では技術ではなくコンテンツを扱っているという違いがある。

【学校図書館司書の養成について】

Q:三浦氏 学校において学校図書館司書がどのように養成されているのかについて教えてほしい。

A:Pimrumpai 博士 チュラロンコーン大学では学校司書を全く養成していない。しかし他の大学では教育学の図書館学専攻の学士号として授与しており、卒業生の大半が図書館員として学校図書館に勤めてきた。しかし教師同様、学校司書になるためには教育学コースで 15 単位が必要ということを政府が決めるなど、近年変わってきている。学校司書になるために勉強する科目は教諭と重複している。

A:李常慶先生 学校図書館は中国では欠けており、学校図書館を研究する人も少ない。児童図書館員や学校図書館員の教育が欠けており、その養成はまだ社会でも認識されていない。

Q:三輪氏 1990 年代以降、アメリカの影響を受けているということだが、アメリカは学校図書館を重要視しているのに、なぜ中国では学校図書館が軽視されているのか。

A:李常慶先生 アメリカの図書館学校のプログラム分析から始まったのは確かだが、中国は未だ発展途上国という国情があるので、まだ学校レベルの図書館を行うほどの必要性を認識していない。また北京大学の教員や学生も目を向けることがない。

Q:宮部氏 中国では学校には図書館があって、学校司書がいるのか？

A:李常慶先生 学校司書はおり、現在二つの動きがある。都市部の高校ではほぼ整備され、小学校や中学校でも整備が進んでいる。他方で、小中学校で情報科目が義務付けられており、特に地方の大学の図書館学科の学生にとっては有力な進路になりうる可能性がある。

Q:竹内氏 学校図書館に関するタイの状況も知りたい。

A:Pimrumpai 博士 タイの学校図書館システムは公共図書館システムよりも非常にしっかりしている。図書館協会の中に学校図書館グループがあり、非常に活発に活動している。大学によって様々なプログラムがあるが、先ほど述べたように学校図書館員の養成に焦点を当てている大学では多くの図書館員を輩出しており、PTAからの支援も多くある。さらに私立学校の中には学生のための情報サービスを活発に支援しているところもある。

Q:渡辺氏 タイでは教師や図書館員には資格が必要か。

A:Pimrumpai 博士 教諭資格は持つべきだが実情は異なっている。教育学を専攻していれば、採用の段階では資格が要求されることはない。

Q:三輪氏 教育学部で学校図書館員を教育する教師でも教諭資格は持っていないのか。

A:Pimrumpai 博士 持っていない。ただシステムが違っており、学部を卒業して政府機関に就職する学生はエントリーレベルに入るので、資格は必要ないためである。

[初等中等教育における情報教育の影響]

Q:竹内氏 そろそろ話題を変えたい。中国では小中学校で情報科が始まることで図書館情報学を専攻する学生にとって大きなジョブ・マーケットになるということだが、タイでも同様のことがあるのか？

A:Pimrumpai 博士 タイでは学校図書館員も小学校で正式な授業をもっている。大半が図書館の利用の仕方についてであるが、他の科目と連携して子どものための情報リテラシーを教える試みもある。

A:三浦氏 日本でも情報教育が高校で始まり、内容は技術的なものとそうでないものがある。自分は校長をやっていた時に理学系で天文学を専攻した人を採用したが、図書館学を

専攻した人が採用されるのは日本の場合かなり厳しい。理科や数学の先生も情報科の教諭免許をもっている。中国のように楽観的ではない。

A:李常慶先生 情報科目の教員を採る場合、コンピュータ専攻科より情報管理科のほうが優先的に採用される。図書館学科と就職先で競合する場合があるが、情報管理科が有利であるのは、コンピュータの使い方などを教えることができ、高校生レベルの技術を教えるにしてもそんなに難しい内容でないと思われるからである。

Q:宮部氏 日本では教員免許が必要だが、中国も同じか？

A:李常慶先生 日本と同じである。

A:上田氏 三浦先生の採用ケースは修士ということだが、情報学は理系の就職口と考慮されており、カリキュラムもコンピュータ工学中心となっている。自分の学部でも4、5人採っているが、就職の実績はない。日本の場合は、工学部の学生のものと考えていいのではないだろうか。文科系で申請すると邪魔が入るのではなかろうか。

[大学院教育の位置づけ]

Q:竹内氏 次のトピックに移りたい。修士課程の位置づけだが、中国でも現職者の大学院があり、タイでも論文なしの大学院がある。このように研究志向ではなく、実学志向の修士課程という議論が始まっていると思われるが、その背景について議論したい。

A:Pimrumpai 博士 先ほど、タイではほとんどの大学院が論文付きのコースであると言ったが、大半が論文なしコースであるアメリカの事例とは違う。これまで修士課程が最も高レベルな学位として長いこと位置づけられており、チュラロンコーン大学は研究大学であるため、論文を書くことは研究能力を育成する訓練でもある。我々が論文なしコースを導入すべきかを議論し、親機関の政策も調査した結果、論文コースを残すことになったのはこのためである。大学の中にはプラン A、プラン B として論文なしのコースも提供しているところもあるが、これは、より多くの学生をひきつけ卒業を早めて就職させるためであり、伝統的なりサーチプログラムとあわせて提供している。このように我々は図書館情報学の研究者も育てているのである。

Q:三輪氏 論文コースを提供している限り、研究者を育成する必要があるということか？

A:Pimrumpai 博士 実際のところ優先順位は高いわけではないが、専門学位であるので研究能力を備える必要性がある。図書館情報学の分野におけるタイの研究活動が活発ではな

いことから問題が生じている。図書館情報学の領域では多くの調査研究プロジェクトを行う必要があるのだ。

A:李常慶先生 中国の社会の変化のひとつに高学歴化があり、「科挙」制度の現代版とも言える。多く人は大学に入りたい。背景には歴史的背景と就職のプレッシャーによる競争の激しさがある。中国では能力よりは学位を重んじる傾向にあるため、専門知識の必要性よりも、社会的なプレッシャーのほうが大学院に入る動機となっている。また MBA に代表されるように、中国の大学にとって大学院教育は収入源のひとつとなっている。米国の影響も見逃せない要因である。

Q:渡辺氏 かつてアメリカに滞在していたとき、シカゴ大学の教授から「専門職として認められるためには2 マスターズが必要」ということを言われていたが、中国やタイではどのように考えられているか？

A:Pimrumpai 博士 学生が2 マスターズを好んでいるかどうかは知らないが、実際ところマスターよりもドクターを希望する学生は増えている。しかしアメリカのように図書館情報学以外の分野を知ることは、例えば医学図書館やアーカイヴで働く時などに役立つことが考えられる。学生が2 マスターズや3 マスターズを選択するかどうかはわからないが。

Q:渡辺氏 自分の専門領域をしっかりと修めた上での「2 マスターズ」という意味合いだが、中国ではどうか。

A:李常慶先生 「2 マスターズ」は流行る土壤がある。科挙はランクづけであり、中国では「修士を2 つとっても結局は修士であり、ドクターではない」といわれてしまうので、「2 マスターズ」ははやらないだろう。ドクターをとっておいたほうが有利である。儒教では上の学位をとることを重視する。

Q:三浦氏 タイでは修士が専門学位になるのか？

A:Pimrumpai 博士 専門学位は学士で、図書館員になるのは学士以上が要求される。しかし給与は修士のほうが学士を上回る。

Q:三輪氏 修士では高い給与をえることができるということだが、一方で学歴はなくとも長く働いている人の給与はどうなるのか。

A:Pimrumpai 博士 ケースによるが、長く働いている人はスキルに合わせて給与が上がるようになっている。

竹内氏 長時間になりましたが、本日は遠方からお越しいただきありがとうございました。本日はこれにて終了いたします。

【閉会の挨拶】 上田修一

充実した内容の会議になった。コンサバティブにやっているタイと、先駆的にやっている中国の事例があり、日本にとっても有意義な話だった。2月にも研修会があるので参加してほしい。海外調査も実施したいと考えているので、よろしくお願いします。